
バカとISと幼馴染と召喚獣

takumi

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとIISと幼馴染と召喚獣

【Zコード】

N7489Z

【作者名】

takumi

【あらすじ】

・バカ幼のメンバーがIIS学園に入學して過すどたばたコメディ。

プロローグ

・銀河 side

始めて北条銀河です。我々はまだ今受験を受けに文月学園の受験会場に向かっている。

ちなみに我々とは俺と幼馴染の2人である吉井明久と服部瞬の三人のことである。

「さ、寒い」

「寒いねー」

「寒いでござるのー」

しかし、受験は学園ではなく四駅先の多目的ホール。まつたく、めんどい。

「それにしても、バカなことをする人もいたもんだね。カンニングするなんて」

「まあ、そうでござるのー。いつゆう事は自分の力でやらなければいかんのにのーとこりで銀河殿？大丈夫でござるか？凄い震えているでござるが」

「だ、大丈夫 . . . 大丈夫 . . . 」（ガクガクブルブル）

「全然大丈夫じゃないね（でござるのう）」

「うるせー . . . 僕は何故か寒いのに弱いんだよ。

「ほら、頑張って銀河」

「やつでござるよ。あと少しの我慢でござるよ」

「お、おつ。頑張ってみる」

そんなこんなで田的町には着いたのだが . . .

「ねえ、銀河、瞬」

「「なんだ（でいざる）明久（殿）」「（殿）」

「僕達道に迷つてな」？」

「「迷つてるな（るどいざるな）」「（なみあわいざるな）」

ただ今、絶賛迷子中です。畜生 . . .

「はあ～何で迷子になるかな？」

「知るかよ。はあ～しうがないサン。」このマップ出してくれ『了解しました。マスター。少し時間を下せ』

俺がポツケからだした指輪から女性の声がする。俺のインテリジョントイバイス【サン・バースト】だ。

「さて、サンが探している間に俺達も歩いて探すか

「もうでいざるのつ」

「じゃあ、あそこ開けて見る」

「そうだな」

「それじゃあ . . .

「失礼しまーす」

「お主らせめてノックべらじませー」. . .

瞬がなんか言つてゐるけど気にしない気にしない。

「あー、君達も受験生だよね? はー、向こうで着替えて。時間押してるから急いでね。」「、四時までしか借りられないからやつてく

つたらないわ。全く、何を考えて」

三十代後半くらいの女性教師は、かなり忙しいらしく。俺達の顔を見ずに指示だけ出して言ってしまった。

「今日の受験は着替えまでするの?」

「さあな? じう思つ瞬?」

「ふむ . . . ん? あそこで誰かあるだ?」

「えつ? あつ本当だ」

「おーい! 君!..」

「なんだ?」

「君もここに受験しにきたのか?」

「ああ。お前らもか?」

「おひ。あ、名前言つてなかつたな、俺は北条銀河名前でいいぞ。んでこいつちが」

「吉井明久だよ。僕も名前呼びでかまわないよ」

「拙者は服部瞬で」」やれる。名前でかまわぬぞ」

「銀河に明久に瞬か。俺は織斑一夏。一夏と呼んでくれ」

「んで。まあ話しあはここまでにしてさつさと着替えようぜ」

「そうだね。え~つと?」

「これじゃないか?」

「そのよつで」」やれるな」

お着替え中

「さて、着替え終わつたが何をすればいいんだ?」
「う~ん? ねえ一夏。何か聞いてない?」
「いや。何も聞いてないぞ」
「なら、瞬は . . . つて、何見てるの?」
「あのカーテンの先に何かあるような気がするので」」やれるが?」

「どれどれ？」

「あ、これ、勝手にあける出ない」

明久がカーテンを開けるとそこには・・・打鉄一機とラフアール・リヴァイヴ一機合った。

「ねえ、これってEISだよね？」

「あ。でもなんでこんなところに?..」

そう言いながら俺はラフアールに明久は打鉄に手を触れる。

キイン!!

「「...?」「

「な、なんで?」

「EISが起動した?

「嘘だろ...」

「これは又...とんでもない事になつたでござるのう」

女性にしか反応しないEISを俺と明久が何故か機動させてしまった。

「ええーーー?な、なんでEISが機動するのー?」

「おいおい...瞬。一夏お前らも触れてみろ」

「お、お?」

「ひむ」

2人もEISに手を触れる。

キイン!!

そして、2人のI-Sも機動する。

「ま、まじで . . . ?」

「はあ～大変なことになつたで～ござるのう」

「とりあえず、一夏と瞬は今日から俺の家に来い」

「な、なんでだ？」

「考へても見て？僕達は今まで男では起動できなかつたI-Sを機動させたんだよ。それを調べるために手荒なことをする輩もでかねないんだよ」

「な、なるほど」

「とりあえず、平和な学園生活は遅れそつにはないで～ござるのう . . .」

「だな . . .」

平和な学園生活はないよつだ。はあ～

・銀河side

ISに乗れる事が判明してから3日たつた。あれから、政府は来るは（因みに一夏は俺達が総理と知り合いという事に驚いていた）研究者が来るは（是非解剖させてくれと訳の解らない奴もいたけど、地面を軽く拳で殴つてひびを入れたらあっさり引いてくれた）マスクミは来るで大変だつた。

「はあ～全く…ど～なつてんのかね？何で俺達がISを動かせるのやら？そこそこ何か分かつた？ジェイル」

『う～ん。こればっかりは私も解らないな』

「そつか…そう言えば、俺達のISは？」

『うむ。君達のISはインテリジェントデバイスをIS用に改造してたよ。つまり、今までと同じ用に戦えるよ。今、こっちに来てる明久君に渡すから今日の夕方までには届くよ』

「そつか…ありがとなジェイル」

『な～に構わないさ。それより君達3人の他にいた男の子名前何て言つたけ？』

「織斑一夏の事か？」

『そうそう。それで調べてみてどうだつたんだい？』

「ああ…織斑一夏。第一回モンド・グロッソ大会優勝者織斑千冬の弟。そして、第二回モンド・グロッソ大会決勝戦当日に誘拐されている」

『誘拐とは…また、物騒だね。で？君は誰が犯人だと思つているん

だい？』

ファンタスク

「亡国企業とドイツ軍が手を組んでやつた事だと思つ

『その根拠と理由は？』

「まあ、ドイツ軍が一夏を発見した際の速さ。いくら自国とはいってもさうさう…まるで最初から知っていたような気がする。次に一夏をさらつた理由は織斑千冬のデータが欲しかったからだと思つ」

『何故だい?』

「ブリュンヒルデとまで呼ばれた人のデータをまじかで撮れたら、軍としてこれほどラッキーな事は無いでしょう。ただ、織斑千冬がそうやすやすとドイツ軍に入るとは思わない。だから織斑千冬に恩を売つて確実にデータを撮つた。それを何に使うかはまだわかりませんが」

『なるほどね』で?君はどうするんだい。今後は『

「取り敢えず、一夏を鍛えたいと思います」

『まあ、それは絶対やらなくちゃいけない事だよね』

「ええ。いつ亡国企業^{フアンタム・タスク}の連中が襲つて来るか分かりませんからね。追い返すぐらいの強さはつけてもらわないと」

『だが、どんな風に教えるんだい?』

「3日前にサンで一夏の体のデータを撮つたんですけど、どうやら一夏は魔力を持つてるみたいなんですよね」

『そう言えばサンを改造してたら、そんな物が載つてたね。確か、魔力ランクはSS+、魔力変換資質は炎、水、氷、雷、光。術式は古代ベルカ主体のミッドとの混合ハイブリッドだつたね』

「あ、はい。ついでに、一夏は剣道をやつていたみたいで、剣術を瞬が、戦闘関連を明久が、戦術面と学習面を俺が受け持つようになつてゐるよ」

『デバイスとI-Sの方はどうするんだい?』

「俺が作るから材料送つてくれる?」

『分かつた。2時間ぐらいしたらそつちに転送するよ』

『ありがとう。ジユイル』

『それじゃあ、もう切るけど体には気をつけるんだよ』

「ああ。分かつてゐるわ」

『ふふ…そつかい。それじゃあまたね』

「ああ。またな」（ペチー）

ジエイルとの通信が終わり通信機の電源を切る。

「さてと…一夏達が来るまであと30分ちょいか…お茶の準備でもしますかね」

さて、一夏のデバイスとエレガントなにじよつ？

一夏のバリアジャケット

・一夏 side

「一夏が文月市か～結構大きい街なんだな」

俺達がI.Sを動かせる事が判明して3日。もう3人が文月市にいる為俺もI.S学園に入学するまでの1ヶ月銀河の家にお世話になる事になった。千冬姉の説得に時間がかかったが…

「えーっと…確かに瞬が迎えに来てくれるって言つてたけど何処だ？」

因みに俺は伊達眼鏡と帽子をかぶっている。一種の変装だ。

「あつ！一夏殿いかりでいざるよ」

「あつ！し、瞬？」

瞬の声が聞こえる方を見ると青色の車の運転席の方から手を振つていた。

「な、なんで車を運転してるんだ！？瞬はまだ車を運転できないだろ！？」

「ほへ？一夏殿。拙者はすでに免許証を持っているのでいざるが？」

「ほれ」

瞬が俺に免許証を見せてくる。確かに瞬の免許証のようだ。

「や、それでも何で？」

「まあ、その事については銀河殿の家についたら話すでいざるよ。

所で「」飯はもう食べたので「」やれるか？」

「いや、食べてないけど…」

「では、一回拙者の家に行つて「」飯を食べるで「」やれるか。では、助手席に乗るで「」やれるよ」

「お、おひ」

取り敢えず俺は車の助手席に乗り込んだ。

移動中

「」やれるよ～」

瞬の車に乗る」と30分。ついたのはかなり立派な日本屋敷だった。

「瞬つて何処かのお金持ち?」

「あ～違うで「」やれるよ。」これは拙者が働いて貯めたお金で土地を買って建てて貰ったので「」やれるよ」

「へえ～（自分で働いて貯めたお金つて…一体どんな仕事したんだ？）」

「本当は拙者が引き取った義妹が3人と住んでこるので「」やれるが生憎3人とも用事での～」

「は～しかし広いな～」

「ふふ。では、そこの部屋で待つてて欲しいで「」やれる。」飯を作つてくるで「」やれるから」

「ああ。よかつたら俺も手伝おつか?」

「いや、大丈夫で「」やれるよ」

「そつか。じゃあ、失礼します」

俺は部屋に入る。

「では、拙者も『』飯を作るで』あるかの。さて向を呑ひつ』『それるかの』」。

銀河 side

瞬と一夏が匂の家で』『飯を食べてゐる頃。銀河はと『』。

「さてと、確かに部品を送つて来いとは言つたが…どんだけあるんだよー? 5万個ぐらいはあるぞ部品ー?」

ジエイルの奴どんだけ寄越したんだ?

「まあいいか…取り敢えずデバイスをさしつけと作つちまおつ。デバイスなら作るのに3時間もあれば足りるし」

取り敢えず最初にデバイス作りから取り組んだ。

「さてと、一夏はベルカ主体だけど初心者だしインテリジェントデバイスの方がいいよな。取り敢えずカートリッジシステムは組み込んで後は…」

こんな感じで俺は瞬達が来るまで作っていた。

「ただいま~」

「ただいま戻りました」

「お邪魔するよ。銀河」

「お邪魔するで』『おるよ。銀河殿」

「お、お邪魔しまーす」

「どうやらみんな一緒に来たみたいだな。

「おかえりアリス、アニース。いらっしゃい明久、瞬、一夏」

「ただいま戻りました『ご主人様』」

「戻りました『ご主人様』」

「お帰り。健康診断大丈夫だつた?」

「はい。2人揃っていたって健康だそうです」

「そうか。それじゃあ着替えておいで」

「はい」

2人の女の子が自分の部屋に行く。

「なあなあ銀河。あの2人って誰だ?」

「ああ。俺の専属メイド?で髪の長い方がアリスで短い方がアニースだぞ。因みにどちらも銀色の髪色だ」

「いや、髪の色は見てわかる。てか、何で専属メイドの所が疑問系なんだ?」

「まあ、気にするな」

「本当は使い魔なんだけどね~」(ボソボソ)

「そう言えば、なぜメイド服をいつもあの2人は来てているのでござるか?」(ボソボソ)

「何でも銀河のかあさんがメイド服を渡して着たら気に入つたららしくてそのままつてらし~よ」(ボソボソ)

「ふーん」(ボソボソ)

何か2人がブツブツ言つてるが気にしない、気にしない。

「ご主人様。お食事の方は何時頃にお作りしましょつか?」

「あ~じやあ7時頃に食べたいな」

「分かりました~」

「それじゃあ俺達は俺の部屋にこりがり

「お飲み物をお持ちしまじょうか?」

「いや、やれべりこ自分でやるよ

「かし」」まじました~」

「かし」」まじました~」

「ふつ。わひと..

「そんじゅあ、俺の部屋に行へば一

「「ねーひー」」「

「お、おーひー」

「一ひーお、おー

銀河の部屋

「さてと、紅茶、「一ヒー」、緑茶、オレンジジュー・スピガがい~?」

「僕は紅茶

「俺は緑茶かな」

「では、拙者も緑茶で」

「んじやあ、俺は「一ヒー」と

カップと湯飲みに飲み物を注ぐ。

「わひと、一夏」

「な、何だ?」

俺がいきなり真面目な顔つきをしたから驚いている。一夏。

「今から少し前と俺達の話をする。耳の穴つかじつてかーく聞
いとけよ~。」

「お、おーひー

「じゅあ、説明するぞ。ま~..

説明中

「んで、一夏。感想は？」

「いや、取り敢えず纏めるとだな。お前らは時空管理局という所のエリート局員で魔法が使える。そして、俺にも魔法の素質がある。更に俺の誘拐が元々仕組まれていたものであると……」

「まあ、そんな所だ」

「そして、その組織はまだお主を狙つて居るで」^{アザウル}「やるよ」

「そうか。なあ、一ついいか？」

「何？」一夏

「俺にも魔法の素質があるって事はお前らみたいに強くなれるって事だよな？」

「うん。勿論それは努力しだいだけ」

「なら、俺を強くしてくれないか？　いつまでも千冬姉に手つけて貰つてばつかじや嫌だし」

「勿論　その為の僕たちだもんね」

「学園に入るまでは国家代表と渡り合える力までにしてあげるでござるよ」

「HJの方も任せり完璧なお前専用の機体を作り上げてやるよ」

「おう！」

「そんじやあまづ…ほい」（ポイ）

「おつと、（パシ）これは…剣のペンダントか？」

「これがお前のインテリジョントデバイスつまりお前が魔法を使う為に必要な物であり相棒となる物だ」

「相…棒」

「取り敢えず、マスター認証をするから、移動するぞ」

移動中

「何で、廊下の壁際立つ？」

「ちょっと待つてる」（パンパン）

銀河が壁を叩く。そうすると、壁がスライドしてエレベーターが出る。

「つかー！？どうなってるんだー！？」

「地下秘密基地の入り口の一つだ。さつー行くぞ～」

地下秘密基地に降りてます

「！」、「これは！？」

「どう？結構大きいでしょ？」

「これでやつとこを8割方完成でいいわよ」

「取り敢えず、トレーニングルームに行くぞ」

因みに地下秘密基地はリボーンの日本支部と同じです。

トレーニングルーム

「それじゃあ、マスター登録をするからここに立ってくれ

「おう」

「それじゃあ、さつき指示した通りにやつてくれ

「分かった。マスター認証織斑一夏」

「術式は古代ベルカ主体のミッドとの混合ハイブリッド」
「俺の愛機の個体名称を登録」

「愛称はパライト」

「正式名称『ホワイト・パラティン』」

「ホワイト・パーティーンSet up...!」

一夏が白い光に包まれる。そこには、白と銀色の軽鎧のバリアジャケットに両腰に日本刀を携えた一夏がいた。

「これが俺の姿?」

「そうだ。まあ、最初はなれない事も有るけど、頑張れや」

「おう!!!」

一夏の修行が今始まる

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7489z/>

バカとISと幼馴染と召喚獣

2011年12月31日22時52分発行